

〈一般研究課題〉 地方近代洋風建築のデザイン的特質と保存に
向けての課題 — 愛知県を事例として —
助成研究者 名古屋市立大学 溝口 正人



地方近代洋風建築のデザイン的特質と保存に向けての課題 — 愛知県を事例として —

溝口 正人
(名古屋市立大学大学院芸術工学研究科)

Characteristics of Design and Prospect for Conservation of the Western Style Architecture in Local Town of Aichi Prefecture

Masato Mizoguchi
(Nagoya City University)

Abstract:

In the local towns of Aichi prefecture, there are some modern architecture designed in the local Western style. Through chronological analysis, it is pointed out that the typical style of these architectures is characterized as the eclectic design of Western and Japanese motifs with plastered wall. And many of these architectures are good in quality of design, space and structure, so even now there is much prospect of conservation as a living architecture.

1. はじめに

愛知県に現存する近代建築に関しては、1980年代以降の調査においてリスト化がなされている¹⁾。また著者も参加した「愛知県近代化遺産総合調査」が実施され²⁾、調査対象も広がった。ただし歴史的建造物である建築を保存し、後世に継承していくためには、こうした現存遺構の総括的な把握に加えて、調査に基づいた個々の歴史的価値の評価が第一課題となる。

幕末から建造され始めた洋風建築には、西欧から伝来した建築意匠を自在に取入れた和洋折衷の意匠で構成されたものも多く、文明開化以降の文化的背景を表す文化財としての価値が評価されている。ただし地方における近代洋風建築の多くは地方の工匠によるものであるから、そこに認められるデザイン的特質も地方性に則って理解すべきであり、このような視点に立脚したデザインの特

質の分析が、近代洋風建築の保存活用に繋がる歴史的価値の評価には不可欠である。しかしながら従来の研究では、必ずしも十分であったとはいえない。

そこで本研究は、他地域との比較を含め、主に明治時代後半から大正時代にかけての愛知県、特に尾張地区を中心に、文献、遺構の両面から、近代洋風建築のデザインの時代的展開を考察し、分析を通して保存が急務と考えられる建物の今日的な課題を検討する。

2. 工匠によって建築された洋風建築

幕末以降、ヨーロッパ建築の形態を真似た洋風建築が、近世の伝統的な建築技術を受け継ぐ工匠によって各地に建造された。特に明治初期までの洋風建築は、洋風とも和風とも似つかず、洋の東西を問わない様々な細部装飾を織り交ぜたデザインであった。こうした洋風建築は「擬洋風建築」³⁾と称されている。一般的に、こうした擬洋風建築は、明治20年代からは急激に建てられなくなり、それに対して外国人建築家、工部大学校や工手学校といった教育機関の卒業生等、ヨーロッパ建築に関する教育を受けた技術者による、体系だった洋風建築が増加していったと認識されている⁴⁾。

洋風意匠が採用された建物には、官庁、学校といった公共建築に加え、商業建築、邸宅などがある。ただし愛知県の近代建築に関する従来の研究では、官公庁建築に対する考察が進展する一方で、町の近代を担ったともいえる商業建築に関する分析は十分に進んでいるとはいえない。そこで本研究では、商業建築のなかでも、都市における洋風建築の導入の契機となった建物の一つであり、新たな建築種でもあった銀行建築について考察を絞ることとした。

銀行は、ヨーロッパの社会制度による金融機関で、政府が明治6年に第一国立銀行を開業させたのを嚆矢として、明治から大正時代にかけて全国各地に数多く設立された。明治26年8月の貯蓄銀行条例発布を経て、地方で私立銀行の設立が急増したといわれている⁵⁾。

東京の日本銀行本店（明治29年、辰野金吾設計）のような工部大学校出身の建築家によるレンガ造や石造の本格的な洋風建築に対して、こうして設立された地方の銀行では、土蔵造の形態を持つ事例が多く報告されている⁶⁾。この種の銀行建築は、内観が洋風意匠によって構成されるのに対して、外観は土蔵造を採用するといった和洋の意匠の混在がみられる事例が多い点に特徴がある。このような土蔵造の銀行建築は、明治の終わりまでは建設され続けるが、大正時代に入ると本格的な洋風意匠が選択されるようになり、建築されなくなるとされている⁷⁾。しかしながら現存遺構に即して見た場合、愛知県でこの見解は妥当といえるのか。この点が本研究の第一の課題である。

3. 現存遺構にみる洋風建築の意匠的な実態

愛知県における銀行の開業状況をみれば、明治9年に第十一国立銀行が開業、三井銀行の支店が開業され、明治中期頃から私立銀行が数多く開業し、各地に支店が設立されている。これらの銀行建築のうち復原修理され保存されているものとしては小弓の庄と中馬館の2事例がある。

小弓の庄は、旧加茂郡銀行羽黒支店であり、平成7年に解体、復原の後、まちづくり拠点施設として利用されている建物である（図1参照）。また中馬館は、旧稲橋銀行足助支店であり、昭和56年に復原、修理されて同57年に公開され、昭和59年には愛知県指定有形文化財の指定を受けた建物である（図2参照）。この他、今回の調査研究では、犬山市に旧村瀬銀行犬山支店、一宮市に旧村瀬銀行萩原支店、津島市に旧愛知銀行津島支店が現存していることがわかった。以下、既に保存さ



図1 小弓の庄



図2 中馬館

れている2例と、従来の研究では取り上げられていないものの、現存が確認できた3例を建設年代順に述べ、それぞれのデザインの特徴を整理する。

ア) 旧加茂郡銀行羽黒支店 (小弓の庄)

平成9年に行われた解体、修理に際した調査によって発見された鬼瓦のヘラ書により、明治40年代に建造されたと考えられる。加茂郡銀行が設立されるのが明治43年であることから、同じ頃に建設されたものであろう。木造2階建、入母屋、塗籠造の建物で、壁面には、蛇腹の繰り形、隅石が、窓廻りには、ペディメント（三角破風）といった装飾が施され、窓には両開きのガラス窓が設えられている。一方、正面玄関には唐破風の屋根が付されて、懸魚に落束、軒下飾りがみられ、和洋の意匠が断片的に混在した外観となっている（図3-1）。内部は、客溜と営業室上部が吹抜けており、2階床高さにギャラリーが廻っている（図3-2）。2階吹抜け奥の広間と吹抜けとの間仕切には、引戸が設えられ、上部には欄間があり、外観同様に吹抜け廻りでも和洋の意匠が混在している。



図3-1 正面入口



図3-2 内部吹抜け

イ) 旧愛知銀行津島支店

現在、印刷会社の作業場として利用されている。『愛知銀行四十六年史』（昭和19年刊）に掲載された支店の開設、廃止状況によれば、明治40年から43年の間に開設されたと考えられる。現地のヒアリング調査でも建設年代は明治後期とされ、支店開設時期を建設年代とみてよい。木造2階建、寄棟・妻入、塗籠造の建物で2階軒は出桁でうける（図4-1）。1階の窓、2階の窓には、



図4-1 旧愛知銀行津島支店外観



図4-2 内部吹抜け

木製の丸棒の格子が窓枠に嵌め込まれている。正面入口には、モルタルの戸枠、1階開口部の腰部分には、腰張りがみられる。内部は、全体が2階までの吹抜けて天井は格天井とされ、通りに面した前方壁面にはギャラリーが一部残っている（図4-2）。

ウ) 旧稲橋銀行足助支店（中馬館）

明治42年に現在地を取得し大正元年に開業した。明治44年に発行された写真帳『足助の観光』（明治44年刊）にみられる社屋は、切妻の塗籠造で、現在の形態とは、大きく異なることから、大正元年の開業に合わせて建造されたことになる。木造2階建、平入、塗籠造の建物で2階軒は出桁でうける。両側面の1階部分には、袖うだつが建ち上がり、袖うだつに対して正面入口は、約1.3mセットバックしている。1、2階開口部は、窓枠が漆喰で虫籠窓形式に塗り籠められているのが特徴で、金属製（現在は木製）の太い格子が窓枠に嵌め込まれている。正面入口の戸枠は石張りとする。内部は、通りに面して手前が客溜、カウンターを境にして奥が営業部で、客溜と営業部前方の上部は吹抜けており、2階床高さにギャラリーが廻り、天井は格天井とする。1階の西側奥には局長室があり、2階のギャラリー奥には12畳の座敷がある。



図5-1 旧稲橋銀行足助支店外観



図5-2 内部吹抜け

エ) 旧村瀬銀行犬山支店

本町通り沿い、中本町に位置する。昭和初期の金融恐慌の中、昭和7年に休業となり、以後はパチンコ店、服地仕立屋となっていたが、昭和40年頃から空き家となっている。建設年代は、今回の実測調査で発見された棟札により、大正2年12月29日上棟と確定した。木造2階建、寄棟、塗籠造の建物で、軒下には出桁が確認される。現状は、正面背面の全面と南側の1階側面が取り払われ大きく改造されており、旧状は全く不明である。しかし2階側面に残る開口部には、上げ下げ窓と壁体に引き込むよろい戸がみられ、正面の開口部も同様であった可能性が高い。内部は、1階床、天井も取り払われており改造が大きい。2階は、中央東西に半間幅の廊下を通して居室が設けられているが、2階床は建設当初の材質とは考えにくいことから、後の改造によるものと推測される。現地のヒアリング調査では、通りに面する前面過半が、営業室の吹抜けであったという。西南の居室には、現在も格天井が残っており、営業室の天井か、2階居室の天井であったと想定される。



図6-1 旧村瀬銀行犬山支店外観

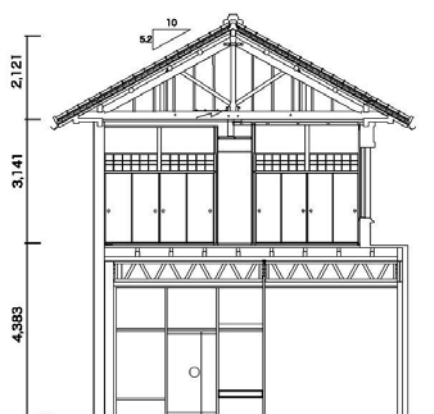


図6-2 梁間方向断面図

オ) 旧村瀬銀行萩原支店

かつては問屋場であった敷地に隣接して建てられたもので、聞き取り調査によれば、大正8年に建造されたという。昭和恐慌による営業停止の後、肥屋の倉庫、種屋の店舗兼住宅として使用され、昭和36、7年頃から乳母車の店舗として利用されている。木造2階建、寄棟、塗籠造の建物で、2階の軒は出桁で受ける。通りに面した1階前面は、現在店舗のショーウィンドウとして



図7-1 旧村瀬銀行萩原支店外観



図7-2
内部吹き抜け

改造され覆われている。2階部分に現存する建設当初の開口部は、上げ下げ窓である。内部は、手前に客溜、カウンターを境にして奥に営業室がある。営業室の床は当初のもので、客溜よりも一段高くなっている。壁面に腰張りが廻り、奥の壁面には金庫が設置され、金庫の手前よりには、2階へ上る階段がある。客溜、営業室部分は吹抜けで、前面と背面、片方の側面にギャラリーが廻っている。天井は、塗料で塗重ねられているが、白漆喰は剥がれておらず、美しい仕上げが状態良く保たれている。2階には2部屋があるとみられるが、未調査であり詳細は不明である。

カ) 現存遺構の意匠的特徴

現存する事例の形態的特徴を整理すると、5例とも内部には吹抜けがみられ、洋風意匠が用いられているのに対して、外観では、町屋形式、あるいは塗籠造が採用されている。特に、旧愛知銀行津島支店、旧稲橋銀行足助支店では、洋風建築の意匠は、ほとんどみられない点がデザイン的な特徴である。1階開口部下の腰壁や、丸格子、袖うだつは、町屋形式をもとに、銀行としての機能を視覚化するために採用されたと理解できる。

一方、旧村瀬銀行犬山支店、旧村瀬銀行萩原支店は、開口部に上げ下げ窓やよろい戸がみられる。塗籠造の壁面構成は、和の建築形態を受継ぐものともいえるが、開口部には、先の2例よりも積極的に洋風意匠が取り込まれている。

一般的には、このような和洋の意匠が折衷された土蔵造の銀行建築は、大正時代には姿を消していたと考えられているが、現存する5事例は、明治40年代から大正時代にかけて建造されている。愛知県においては、大正時代に入ってから、和洋折衷の意匠が依然として採用されていた実態が確認される。

4. 画像資料にみる洋風建築の意匠的な実態

明治時代の都市空間や建築意匠を確認できる文献資料に、写真帳がある。写真帳には作成意図があり、写されている建物は、当時存在していた建物すべてではない。しかし、現在は失われている都市空間や、建物の外観を確認するのに有効な画像資料といえる。

今回、確認・閲覧できた写真帳に、『愛知県写真帖』と『尾北写真画帖』があり、両書に銀行の外観が数例掲載されている。以下ではそれぞれの概要と掲載された銀行建築の形態的特徴について整理し、上記した現存遺構との共通性について考察する。

ア) 『愛知県写真帖』

奥付によれば、愛知県協賛会によって編集され明治43年3月に発行されている。本書には、愛知県会議事堂や第十五師団司令部といった行政、軍事施設や、学校、工場、会社などが多数掲載されており、それらの意匠には、洋風が多く採用されていることが確認される。このうち銀行は、尾三農工銀行（名古屋市中区新栄町）、愛知銀行（名古屋市区西区玉屋町）、明治銀行（名古屋市区西区伝馬町）、名古屋銀行（名古屋市区西区伝馬町）の4例が掲載されている（表1参照）。

尾三農工銀行と明治銀行（図8参照）は、共に寄棟、木造2階建、塗籠造の建物で、開口部には、上げ下げ窓、両開きの窓が設えられており、壁面には腰巻がみられ、外観



図8 明治銀行

は、和洋の意匠が混在している。明治銀行は、軒蛇腹が設けられており、また軒下部分にデンティル（菌状帯装飾）がみられ、より洋風意匠を意識した外観といえる。一方、愛知銀行（図9参照）と名古屋銀行は、平入、ツシ2階、真壁の建物で、開口部には、堅格子、連子格子、うだつのあるいわゆる町屋形式の建物である。

イ)『尾北写真画帖』

奥付によれば、正木貞弑によって編集され大正元年12月20日に発行されている。本編には、役所や停車場、寺院、などの建物が掲載され、後半に付された営業案内には、個人の商店、工場、医院などの建物が掲載されている。

銀行は、丹葉銀行古知野支店、幼銀行江南支店、岩倉銀行（岩倉町）、古知野銀行（古知野町）、丹葉銀行犬山支店、丹葉銀行（布袋町）、犬山銀行（犬山町）、一宮銀行犬山支店、古知野銀行柏森支店、村瀬銀行布袋支店の10例が掲載されている。

このうち、一宮銀行犬山支店（図10参照）は、寄棟、下見板張りで、軒蛇腹を付け、上げ下げ窓とペディメントに似た窓装飾が設けられている。正面入口には落束、迫持のような装飾が付属する。また木造の1層の建物にも関わらず、寄棟の軒先は、隣接するツシ2階の町家の軒桁よりも上の位置にあり、立ちが高い。ただし正面入口に長暖簾があり、ペディメントは入母屋屋根状となっていて、落束のプロポーションが武骨であるなど、洋風建築を完全に習得した意匠とはいえない。

丹葉銀行古知野支店、幼銀行江南支店（図11参照）、岩倉銀行、丹葉銀行、村瀬銀行布袋支店の5例は、木造ツシ2階、平入の町屋形式で、開口部は、引戸の建具、格子が多い。それに対して、丹葉銀行犬山支店、犬山銀行（図12参照）、古知野銀行柏森支店は、木造ツシ2階、平入の塗籠造で、1階壁面に腰巻が確認できる。なお古知野銀行（図13参照）は、木造2階建の町屋形式である。

『尾北写真画帖』にみる銀行建築の意匠は、一宮銀行犬山支店のように寄棟屋根の洋風意匠による事例と、平入屋根の町屋形式の事例が確認でき、また町屋形式の建物では、塗籠造と真壁造の二種類がみられる。塗籠造3例の2階部分の窓では、現存している旧稲橋銀行足助支店と同様に窓枠が虫籠窓形式で、漆喰で塗り籠められている。また犬山銀行は塗籠造で、開口部を丸棒の格子、1階窓の下部を腰張として、1階から袖うだつを立ち上げる点に特徴があり、旧稲橋銀行足助支店の外観と類似していることが確認される。



図9 愛知銀行



図10 一宮銀行犬山支店



図11 幼銀行江南支店



図12 犬山銀行



図13 古知野銀行柏森支店

ウ) 写真帳にみる意匠的特徴

このように2冊の写真帳には、計14棟の銀行建築が確認できる。これらの建物と現存する遺構の形態的特徴を構造、屋根と壁、開口部の意匠について整理すると表1、表2のようになる。写真帳にみられる銀行建築は、塗籠造や真壁という町屋形式のものがほとんどであり、塗籠造の場合、開口部では、虫籠窓形式の窓と、上げ下げ窓の2種類が確認された。これは上記した現存遺構と共通する意匠で、現存遺構に示される傾向が決して特殊ではなく、一般性を持ちうるものであることを示している。

一方、外壁を洋風の下見板張りとする事例は、一宮銀行犬山支店1例に限られ、この仕上げが採用される銀行は稀であったことになり、あるいは銀行にイメージされる堅牢さにそぐわない意匠と認識されていたものかも知れない。また木造ツシ2階、平入、真壁、連続する格子の意匠に特徴的な、町屋形式の意匠もみられた。ただしこの形式の事例である旧愛知銀行本店は、医師住宅であった建物を改造したものである。このような町屋形式となる丹葉銀行犬山支店と考えられる遺構が犬山市に現存するが、現段階で詳しい調査は行っておらず、詳細は不明である。しかし一般論として、この種の事例は、転用による可能性も想定されることになる。

表1 写真帳に掲載された銀行建築の形態的特徴

書名	名称	構造	屋根		壁		開口部	その他			
			屋根形状	屋根素材	細部	壁面素材		細部	開口部の建具	暖簾、看板	玄関部分の突き出し
愛知県写真帳 明治43年	尾三農工銀行	2階	寄棟	瓦	出桁	塗籠造	軒蛇腹、デンティル、腰巻	両開き戸、上げ下げ窓?		平入屋根	
	明治銀行	2階	寄棟	瓦		塗籠造	腰巻	両開き戸、上げ下げ窓		平入屋根	
	愛知銀行(旧医者宅の改造)	ツシ2階	平入	瓦		真壁	1階部分に袖うだつ、腰巻	両開き戸(納子戸)、堅格子窓	看板	平入屋根	
	名古屋銀行	ツシ2階	平入	瓦	うだつ	真壁?	2階部分に袖うだつ、腰巻	堅格子窓			
尾北写真帳 大正元年	丹葉銀行古知野支店	ツシ2階	平入	瓦		真壁		堅格子窓、台格子		長暖簾	
	幼銀行	ツシ2階	平入	瓦		真壁、ささら子下見(側面)		引戸(格子戸)、台格子、堅格子窓			
	岩倉銀行	ツシ2階	平入	瓦		真壁、ささら子下見(側面)	物寄	引戸、格子窓(?)			
	古知野銀行	2階	平入	瓦		塗籠造	腰巻	両開き戸、虫籠窓			
	丹葉銀行犬山支店	ツシ2階	平入	瓦		真壁、ささら子下見(側面)	腰巻	両開き戸、虫籠窓	看板		
	丹葉銀行	ツシ2階	平入	瓦		塗籠造	物寄、腰巻	引戸、堅格子窓			
	大山銀行	ツシ2階	平入	瓦		塗籠造	腰巻、1階部分に袖うだつ	両開き戸(納子戸)、虫籠窓			
	一宮銀行犬山支店	1階	寄棟	瓦		下見板張り	軒蛇腹	上げ下げ窓、鉄格子(?)	長暖簾、看板	入母屋屋根	窓上部にペディメントの窓飾、落束、軒蛇腹、追持?
	古知野銀行柏森支店	ツシ2階	平入	瓦		塗籠造	腰巻	引戸?、虫籠窓	看板		
	村瀬銀行布袋支店	ツシ2階	平入	瓦		真壁	物寄	引戸、連子格子?			

表2 現存遺構の形態的特徴

名称	建築年代	構造	屋根		壁		開口部	その他			
			屋根形状	屋根素材	細部	壁面素材		細部	開口部の建具	暖簾、看板	玄関部分の突き出し
旧加茂郡銀行羽黒支店	明治40年代	2階	平入	瓦		塗籠造	軒蛇腹、腰巻石張り、隅石、胴蛇腹	両開き戸、両開き窓(納子窓)		唐破風屋根	窓裝飾(ペディメント、持送)、落束、バジボード、持送、下魚
旧愛知銀行津島支店	明治40-43年	ツシ2階	寄棟-妻入	瓦	出桁	塗籠造	腰巻	入口部分不明、丸棒の格子窓(納子窓)			
旧稲橋銀行足助支店	明治44-大正元年	ツシ2階	平入	瓦	出桁	塗籠造	腰巻、1階部分に袖うだつ	両開き戸、丸棒の格子窓(納子窓)			
旧村瀬銀行犬山支店	大正2年	2階	寄棟	瓦	出桁	塗籠造	腰巻	入口部分不明、上げ下げ窓、よろい戸(引き込み式)			
旧村瀬銀行萩原支店	大正8年	2階	寄棟	瓦	出桁	塗籠造	腰巻	入口部分不明、上げ下げ窓			

5. 他地方にみられる塗籠造の銀行建築との比較

愛知県において現存する遺構と写真帳にみられた銀行建築の事例では、塗籠造が多く確認でき、平入の町屋形式で腰壁、虫籠窓形式の窓のみられる事例や、寄棟で上げ下げ窓のみられる事例が確認できた。これらの事例と愛知県以外の銀行建築の形態的特徴に、相違はあるのだろうか。

塗籠造の銀行建築は、各地の事例が報告されている。このうち明治39年に建造された鴻池銀行(後の三和銀行)は、四条通に面した建物で、壁面はセットバックし、1階から袖うだつが立ち上がる。2階部分の開口部は、よろい戸で、その上部には軒蛇腹がみられる。1階部分から袖うだつを立ち上げ、建物前面の壁をセットバックさせる形式は、旧稲橋銀行足助支店(図3-1,2)、明治銀行

(図8)、犬山銀行(図12)にも認められる。また明治銀行は、袖うだつ以外にも、軒蛇腹、よるい戸といった2階部分の意匠や、周囲と比べた立ちの高さで鴻池銀行と類似する。

銀行建築において、以上にみられる意匠がどこまで一般的であったかは明確ではない。しかし、こうした意匠の類似は、上記したデザイン的特質が、各地の工匠による独自の理解の結果ではなく、ある種の共通したイメージの存在によるものであることを示すものといえよう。



図14 鴻池銀行
(大正初めの四条通拡幅後。『京の町並み』より)













6. 時代的にみた意匠の変遷

和洋の意匠の折衷がみられた土蔵造の銀行建築は、大正時代には建てられなくなると考えられてきた。しかし上記してきた銀行建築の事例と写真帳によれば、大正初期にも、和と洋の意匠が折衷された事例がみられる。そこで銀行建築以外の意匠について、『愛知県の近代化遺産』(2004年刊)の調査で取り上げられた洋風建築と、全国の代表的な洋風建築の現存類似例を年代順に並べて、類似する意匠を整理すると、表3のようになる。

現存する銀行建築のうち、和洋折衷の外観構成である旧加茂郡銀行羽黒支店では、白漆喰の壁面に隅石(コーナーストーン)を造り出し、正面入口部分を唐破風屋根とする点に特徴があった。隅石の意匠は、明治18年に建造された旧東山梨郡役所(重文)にも確認される意匠で、唐破風屋根は、明治初期の擬洋風建築の代表例である旧開智学校(重文)にもみられる意匠であるが、明治40年にも同様な意匠が採用されていたことがわかる。唐破風屋根が洋風意匠の建物に取り付く事例は、県内でも、旧陸軍第十五師団関係の建物である旧借行社(明治42年)、旧瀧文庫(大正4年)に確認できる。また大正10年頃とされる旧鳳来町消防団第七分団第二部屯所には、旧開智学校や旧西田川郡役所(重文)のように屋根上に塔が確認される

このように、明治初期の擬洋風建築と、愛知県に現存する明治末期、大正初期の建物にみられる意匠には、共通性を見いだすことができる。明治42年には、東宮御所(赤坂離宮)が建設され、明治末期から大正期にかけての東京や県庁所在地などにおいては、本格的な洋風建築が登場することになるが、一方、地方の町レベルでは、いまだ擬洋風建築と共通するようなデザインが採用されていたことになる。

このような意匠的な展開の原因は、現状では十分には明らかにならないが、影響を与えたであろうと思われるもののひとつに、明治20年代中頃から洋風意匠を収録し始め、大正時代に入っても刊行されている雛形本や設計図集などの設計技術書の存在がある。このような技術書に示された意匠と本研究でみた建築の意匠との類似は、こうした設計技術書が、多くの民間建築の建設に携わっていた地方の工匠にとって、重要な情報源であったことを示しているものとみられる。

擬洋風建築の代表例	『愛知県の近代化遺産』において報告された事例と銀行建築
明治10年	 <p>M9旧開智学校</p>
明治20年	 <p>M14旧西田川郡役所</p>  <p>M16宝山寺獅子閣</p>  <p>M18旧東山梨群役所</p>
明治30年	 <p>M39鴻池銀行</p>
明治40年	 <p>M40-43旧愛知銀行津島支店</p>  <p>M44-T1旧稲橋銀行</p>  <p>M42旧偕行社</p>  <p>M40年代旧加茂郡銀行羽黒支店</p>
大正10年	 <p>T2旧村瀬銀行犬山支店</p>  <p>T4旧新美眼科医院</p>  <p>T8旧村瀬銀行萩原支店</p>  <p>T4旧瀧文庫</p>  <p>T10頃旧鳳来町消防団第七分団</p>

(図版は、『明治の洋風建築』『愛知県の近代化遺産』『洋風木造建築』『京の町並み』による)

表3 明治初期の擬洋風建築と愛知県の洋風建築

7. 保存活用からみた現存洋風建築

保存が急務と考えられる現存遺構として、犬山市、及び所有者の協力のもと、犬山市本町に残る旧村瀬銀行犬山支店、旧丹葉銀行犬山支店の詳細な実測を行うことができた。両遺構とも改造が著しく、調査当初は、創建当初の状況は比定しえない状態であったが、以上にみた類例分析、画像資料の分析から、当初の意匠が想像できるものとなり、また、意匠的には現代においても再現し利用することが可能なものであることが確認された。また旧愛知銀行津島支店、旧村瀬銀行萩原支店は、

保存がさらによく、意匠的な特質を生かした利用が容易に可能となる。

文化財を商業建築として活用した事例として、犬山の旧奥村邸があげられる（図15-1,2）。旧奥村邸は、木造ツシ2階建ての町屋で、1841年に建造されたといわれている。現在、町屋の空間構成をそのまま生かし、フレンチ創作料理のレストランまたはブライダル会場として利用されており、外観の意匠は、ほとんど変更されていない。

このような活用事例と比較したとき、上述してきた銀行建築の内部空間は、吹抜けがあり空間が大きく、空間の使われ方に自由度があるもので、現在においても利用価値が高い。積極的な保存、活用の働きかけを行い、歴史的と評価されるデザイン的特質を損失することなく維持していくことがより可能な事例ということになる。



図15-1 旧奥村邸外観（現状）



図15-2 内観（現状）

8. まとめ

今回は、特に意匠的な側面に分析の対象を絞り、そこに指摘できる特質について考察した。本研究においては、資料整理の進展にともない、地方建築に関する従来の研究では官公庁建築に対する調査が進展する一方で、町の近代を担ったともいえる商業建築に関する分析が十分に進んでいないことが明らかとなった。そこで遺構調査においては、新たな建築種ともいえる銀行建築を中心に比較研究を行ない、保存修景の観点から抽出できる商業建築のデザイン的な要素を整理した。結果、いくつかの点で従来流布していた見解を改める新たな指摘を行うことができた。

1) 洋風商業建築の意匠的な特質と年代

都市における洋風意匠導入の契機となった木造銀行建築の現存遺構について、外観を中心に意匠的な側面から整理分析を行った。従来の研究では、明治時代を終えて、それまで卓越していた土蔵造の意匠はみられなくなると論じられてきたが、少なくとも愛知県での現存遺構には、明確に大正時代前半まで、塗籠造が確認できること、また2階開口部の意匠に着目すれば、近世町屋に類似する虫籠窓の形状のものから、よろい戸を採用した洋風意匠を基本としたものまで多様であることが指摘できた。

2) 商業建築意匠の潮流

画像資料を中心に、すでに失われた洋風建築について悉皆的な収集を行い、同様な視点から整理分析した。画像資料としては、従来はまとまって分析がなされてこなかった明治43年刊の『愛知県写真帖』、大正元年刊の『尾北写真画帖』を取り上げ、傾向と年代観の把握を行った。結果、

同様な意匠が画像資料からも確認できた。よって現存遺構に示される傾向は決して特殊ではなく、一般性を持ちうるものと認識された。

3) 意匠的な傾向

上記の分析を総合して、東京や県庁所在地などにおいて本格的な洋風建築が登場することになる明治末から大正はじめにかけてにおいても、地方の町レベルでは、いまだ土蔵造の意匠が多かったこと、その意匠も体系だったものではなかったことを指摘した。

一方、設計意匠に関する情報としては、設計技術書が当該年代に流布しており、それらの記述内容と比較したとき、このような断片の集積ともいえるデザインも、一方的な工匠レベルの想像の結果というよりは、情報の増加に伴う多様性として理解できることを示唆した。なお現存遺構は、今後、改修費用も含めたフィージビリティ・スタディの結果では、十分商業建築として再生可能であることも指摘した。

なお、本研究に当たっては、遺構所有者、関係自治体、名古屋大学大学院助教授 西澤泰彦博士、愛知工業大学助教授 野々垣篤博士、名古屋市立大学大学院芸術工学研究科 柳澤宏江氏に多大な協力をたまわった。記して謝意を表す。

註

- 1) 『近代建築総覧』日本建築学会編、1980、「近代和風建築全調査リスト」建築雑誌、vol.106、no.1312、1991.4、pp.56-58、「近代建築総覧追補」建築雑誌vol.113、no.1423、1998.6、pp.56-60
- 2) 『愛知県の近代化遺産』愛知県近代化遺産（建造物等）総合調査書、愛知県教育委員会2004.3
- 3) 擬洋風建築の定義については、村松貞次郎『明治の洋風建築』、近代の美術20、至文堂、1974による。
- 4) 註3) 参照
- 5) 『名古屋市史 産業編』、1915.8、pp.201-212
- 6) 初田亨「後ろ髪を引かれた世界」（初田亨、大川三雄、藤谷陽『近代和風建築』、建築知識、1992所収）
- 7) 前掲、初田亨論文、pp.94